

夏目漱石と浅井栄熙

——鏡子入水事件に関わった禅の人——

福岡女学院大学名誉教授(日本近代文学) 原 武 哲

1. 五高教授夫人入水

1898(明治31)年6月末か7月初めの払暁、¹⁾松本直一が梅雨のため増水していた熊本の白川で網打ちをしていたところ、滔々と流れる濁流の中を、1人の若い女が浮きつ沈みつしていたので、居合わせた人々と協力して救い出した。女は熊本の第五高等学校教授夏目金之助(漱石)の妻・鏡子(通称。戸籍ではキヨ。鏡とも書く)であった。

直接の原因は前年(1897年)夏の流産から来るヒステリー性のものであったろうが、発作は常に夫婦の関係が緊張している時に起った。

宮内省皇太子(大正天皇)傅育官落合東郭(為誠)が家主である大江村の漱石宅は平屋造りの閑静な構えであったが、同年(1898年)4月初め、東郭の帰郷のため、熊本市井川淵町8番地(現・井川淵町1番30号)の部屋数の少い借家に転居して、鏡子は精神の内訌を一層募らせていた。

健三は時々便所へ通ふ廊下に俯伏になつて倒れてゐる細君を抱き起して床の上迄連れて来た。

真夜中に雨戸を一枚明けた縁側の端に蹲つてゐる彼女を、後から両手で支へて、寢室へ戻つて来た経験もあつた。……中略……。

或時の彼は毎夜細い紐で自分の帯と細君の帯とを繋いで寐た。紐の長さを四尺程にして、寐返りが充分出来るやうに工夫された此用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。(『道草』78)

このようなヒステリー性の緊張の末、鏡子は遂に幻影に招かれて今まで堅く結ばれていたはずの夫婦の紐を振りほどいて、寢床を抜け出し、熊本の払暁の巷を走った。発作が治まると安心して、つい油断して疲れた体を横たえ、転た寝をむさぼっていた漱石が、はっと気付いた時、鏡子の褥はもぬけの殻だった。

²⁾平常の白川は、藤崎宮下が水練場として最も深く、その五百メートルぐらい上流の小旗神社下が深いだけで、他は膝小僧ぐらいまでの深さで入水などできないようである。「³⁾井川淵の家は藤崎の宮の近くで、白川に面して居る。二階に上ると明午橋が目の下で、橋板を踏む下駄の音が手にとるやうに聞こえる」。幻影に誘われた鏡子は藤崎宮下の水練場あたりで入水したと推測される。少し広く考えても明午橋から上流、藤崎宮下の水練場、さらに上って子飼橋、そして小旗神社下までの6、700メートル間で入水したことは確実である。

鏡子が入水したと思われる白川の水練場附近は、堤防の下、石畳を数メートル積み上げて、その下に石を敷き詰めた磧があり、その下を川が流れていた。梅雨で増水した白川の水は、磧を覆い隠し、堤の上近くまで来ていたかもしれない。

前述のように網打ちをしていた松本直一たちに救出されたが、時間的には払暁^{ふつぎよう}のころであろうか。網打ちは夜から暁にかけてやるらしい。漱石のこのころの句に次のようなものがある。

*4 白川
颯と打つ夜網の音や春の川

助けられた鏡子を井川淵町^{えいき}の家に連れて帰った漱石は、借家などで世話になった、かつての同僚だった浅井栄熙(本人自筆では「熙」を使っているので、以下「熙」を使用する。ただし、引用文中では「熙」を使用することもある)に相談したのであろう。地元熊本の人である浅井は早速^{さつ}人力車を走らせていると、白川沿いの道で、散歩中の顔馴染みの^な野田寛(旧制熊本中学校初代校長。当時、済々黷教諭)に会った。野田が「早々どこに行くのですか」と尋ねると、浅井は「夏目の家内が白川に飛び込んで危く助かったが、新聞にでも出たら体裁が悪いので、記事にせぬため、新聞社に行く途中だ」と言う。

幸い、この事件は当時の『九州日々新聞』(現・熊本日々新聞)の三面記事にならず、スキヤンダルとして五高教授の名誉を傷付けることなく落着した。しかし、夏目という第五高等学校教授の細君が白川に身投げをしたそうな、という噂は次第に町中に広がった。

2. 浅井栄熙の経歴

夏目漱石夫人入水事件を三面記事にしないよう奔走した浅井栄熙とは、どんな人であったのだろうか。私は夏目漱石が熊本時代に参禅したと言われている見性禅寺(熊本市坪井町4丁目9番8号)を訪ね、住職阿部宗徹禅師より浅井栄熙の^{よしすけ}3男・栄資氏(故人)を紹介していただいた。浅井栄熙関係の新資料は大部分、栄資氏の御好意により提供されたものである。

浅井栄熙は1859^(*)安政6年10月28日、父・^{いみな}9浅井栄鎮(新九郎と称し、諱は栄懐。鼎泉・搦謙と号す)、母(旧・寺井氏)の長男として、熊本市安己橋通2丁目において出生した。1871^(**)明治4年3月、数え年13歳で、旧熊本細川藩儒者国友昌(古照軒)の家塾に入り、漢学を修業、1875年熊本県立熊本中学校に入学、普通学を修業した。1878年4月、20歳^{きゆう}で笈を負うて上京し、^{みつくりしゅうへい}箕作秋坪の家塾に入り、英語学を修学した。1879年6月、当時福沢諭吉の慶応義塾と対立の状をなしていた中村敬宇(正直)の同人社(小石川区江戸川)に転学、1881年12月、同人社普通英語学科を卒業した。

1882年7月7日、24歳にして、^ま11福井県福井中学校1等助教諭に任ぜられ、英語・地理・歴史の諸学科担当を命ぜられた。また同年9月12日には、福井県福井小学師範学校1等助教諭兼福井中学校1等助教諭に任ぜられた。しかし、北陸の厳寒は思いの外苛酷であったのだろう、肺を病んで、1883年5月2日、願いに依り本官を免ぜられて、帰熊した。帰郷後は泰勝寺(細川藩主の菩提寺)邸内で後進のために英語を教授した。当時熊本で英語を教授する者稀で、時勢はようやく英語の必要に覚醒して、門下に教えを乞う者が増加したので、遂に立田口久本寺を教室にあて、さらに専門の教師を招聘し、英語・漢文・数学を教授した。

1883年9月^(***)(^{せいせいこう}済々黷同窓会名簿)によると1884年4月)、先学の佐々友房(1854～1906)らの同心学校(同心学舎を発展整備したもの)を発展拡張させた熊本私立済々黷(1882年2月11日開校)英語科

教師となり、1886年8月、済々黷英語科教師を辞した。そして、同年9月には私立熊本英語学会主幹となった。

1887(明治20)年12月27日、文部属に任ぜられ、判任官7等に叙し総務局詰を命ぜられ、上京した。1889年10月26日願いに依り本官を免ぜられ、同年10月3日、臨時帝国議会議事務局雇を命ぜられ、月俸35円を給与せられた。次いで1890年8月25日、貴族院雇を命ぜられ、月俸35円を給与せられた。同年9月11日、貴族院編纂課勤務を命ぜられ、同年12月20日、事務勲励に付き金15円を賞与されている。1891年3月14日、事務勲励に付き金15円を賞与され、同年7月20日、願いに依り貴族院雇を免ぜられ、帰郷した。

1895(明治28)年6月28日、第五高等学校^{*13}英語科の授業を嘱託され、報酬1ヶ月金25円を贈与され、学寮係兼務を命ぜられた。同年8月31日、夏目漱石の友人で、禅の修業をしていた菅虎雄が、第五高等学校^{ドイツ}独逸語及び論理学教授の嘱託を受けて来熊してきた。

菅虎雄と浅井栄熙は禅を通じてたちまち意気投合し、熊本市坪井の見性禅寺の前住職葆岳宗寿や新たな住職宗般玄芳(1848～1922)(1895年6月～99年3月在庵)の下に参禅した。この年、菅は32歳、浅井は37歳であった。

1896(明治29)年1月9日、浅井栄熙は物品検閲委員を、2月20日には春期修学旅行係を命ぜられた。同年4月14日、夏目金之助(漱石)が第五高等学校英語科の教授を嘱託され、報酬1ヶ月金100円で、熊本にやって来た。かつて菅虎雄から紹介されて鎌倉円覚寺^{たつちゆう}塔頭帰源院の釈宗演^{えげ}の会下に参禅^{たざ}したことの漱石は、またも菅虎雄から紹介されて、浅井栄熙を知り、見性寺に行つて打坐を試みる。ここに禅を通じて、浅井・菅・夏目の3者の深い結び付きができた。

1897(明治30)年1月20日、浅井は学寮係主任を命ぜられ、同年3月31日、^{*14}職員と議の合わない所があつて、その職を辞した。しかし、浅井栄熙が第五高等学校長中川元^{はじめ}に提出した^{*15}辞職願には、「座骨神系痛」を理由にしている。辞職した真の理由については未詳である。五高退職後、父の鼎泉の興した第九銀行(禄を離れた士族の共済を図るとともに、地方の殖産興業を目的として創設された地方銀行)の無限責任社員で監査役となった。

1898(明治31)年6月か7月、前述のような鏡子の入水事件が起つた時、既に五高を退職していた浅井栄熙は、かつての同僚のため、新聞記事にならないよう、そのもみ消しに奔走した。ちょうど、入水事件の前後ごろ、同年7月7日、父の鼎泉が亡くなった。その入水事件については、後にもう一度触れたいと思うので、ここでは詳述しないで、浅井の経歴のみを述べたいと思う。

1899(明治32)年、熊本市北坪井に宏済書院という私塾を創設し、子弟の育成に當つた。

1900(明治33)年、第九銀行は父・鼎泉の歿後、後継者の経営は當を得ず、遂に倒産した。当時、浅井栄熙は無限責任社員の監査役だったので、他人の窮状を救うため、私財の全部を投げ打つた。多くの子をを抱えて一家はたちまち困窮に陥り、安政橋通り町に薪炭商を営んだ。しかし、これも士族の商法で、やがて行き詰つて失敗に歸した。

徳富蘇峰は鼎泉を郷党の先輩として兄事し、そのためか、鼎泉の甥阿部充家を国民新聞社や民友社の副社長として経営に當らせていたらしい(浅井栄資氏書簡)。阿部は後に「京城日報社」の社長となつたそうである。経済的に困窮に陥つた浅井栄熙は、阿部の斡旋であらうか、1906年冬ごろ、単身京城(現・ソウル)に赴き、質屋と3等郵便局を営んだ。それで生計を立てる^{めど}目途がついたのか、1909年4月、一家を挙げて京城に移住した。栄

資氏によると、小学4年生になって余り授業を受けないで、京城市南大門小学校に転校したそうである。一家は栄熙夫妻と子女合計8名(長男の^{よしな}榮名は済々黌中学の生徒だったので、熊本に残留した)が、半年ばかり京城で生活した。同年10月、漱石が満韓旅行の時、わざわざ太平町に浅井栄熙を訪ねたことは後に詳述するつもりである。

1909(明治42)年10月か11月、旧藩主細川^{もりしげ}護茂の招聘により、同家の家扶(華族の家務・会計を掌るもの。家令の次席、家従の上席)として、熊本細川家家政所(熊本花岡山の麓にあった横手村北岡の細川家廟所)に迎えられた。1912(大正元)年秋には、東京家政所(当時の小石川区老松町)に移り、1916年、細川^{もりたつ}護立の代には、赤坂新坂町の別邸で家政監督を務めた。

1930(昭和5)年、数え年72歳の時、骸骨を乞うて熊本に帰り、黒髪町^{おぜきぼし}小碓橋畔に知足庵を営み、茶を楽しみ風月を友として安らかな悠々自適の老後を送ろうとしたが、1年余にして、1931(昭和6)年9月30日同地で脳溢血のため死去した。行年73歳。法名、一枝軒靈山自哲居士。

以上が浅井栄熙の生涯のあらましである。

3. 菅虎雄と夏目金之助

夏目漱石が1896(明治29)年4月14日、第五高等学校英語科講師として熊本に赴任した時、浅井栄熙はすでに五高に就任して1年余りたっていた。そして、浅井が五高を去ったのが、1897年3月31日であるから、2人が同僚として五高に勤務したのは、わずか満1年間である。短い時間に過ぎなかったが、菅虎雄を通じて、禅に深く関わりをもった3人は互いに好感をもって交わりを結んだ。

*16 菅虎雄は1864(元治元)年10月18日、筑後国御井郡呉服町43番地(現・福岡県久留米市城南町)に父・菅京山(筑後久留米藩有馬家御典医御医師並七人扶持・32歳)、母・テイ(戸籍名。通称は「貞」と書く。加藤八郎次の次女・22歳)の次男(長兄は夭折したので、長男として戸席に届けられる)として生まれた。字は高悦といった。福岡県立久留米師範学校附属小学校を経て、福岡県立久留米中学校に入学したと思われる。1880(明治13)年、菅虎雄は笈を負うて上京、東京大学医学部予科に入学、改組されて1885年12月、東京大学予備門分^い黌(医科)を卒業、文科に転科して、1888年7月、第一高等中学校文科を卒業した。

同年9月、帝国大学文科大学独逸文学科に第一期生として藤代^い禎輔(一高教授、京大教授。素人と号す)と2人入学した。この年、臨濟宗円覚寺派管長^{いまきたこうせん}今北^え洪川の会下に参禅して、^{ていせい}提撕を受け、「無為」の居士号を受けた。1891年7月、日本最初のドイツ文学専攻の文学士として、藤代^い禎輔とともに帝国大学文科大学を卒業した。

菅虎雄は、同年9月、予備門時代の恩師杉浦重剛が校長をしていた東京英語学校教員となり、また浄土宗学本校教授の嘱託を受けた。1892年9月、東京英語学校焼失により、再建、改称された後身の日本中学校教員となり、1893年2月東京美術学校教育学教授の嘱託を受けた。

1894年9月、大学寄宿舍を出た漱石が東京市小石川区指ヶ谷町の菅虎雄の新居(私の調査では8番地)にしばらく寄食、ある日突然、漢詩を書き残しただけで、なんにも言わずに、ぷいと飛び出してしまった。そして漱石は菅の紹介で伝通院の隣の法蔵院に移った。このころの漱石は「*17 沸騰せる脳漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん為」に漂泊してい

た。「^{*18} 理性と感情の戦争益々劇しく^{あたか} 恰も^{こくう} 虚空につるし上げられたる人間の如くにて天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安身立命^(原)到底無覚束^き状態であった。そして^{*19} 頭頭の鉄鎖を断ずるの斧」を求めて、漱石は鎌倉へ参禅しようと決意した。菅虎雄は既に今北洪川より「無為」の居士号を授けられた立派な居士である。建築家志望の漱石を文学志望に変えさせた哲学者で親友の米山保三郎も今北洪川の会下に参禅し、「天然」居士を授与されている。菅の「無為」と米山の「天然」とは「無為天然」と対になる禅語であり、漱石にとって2人は、「^{*20} 生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したる」者のように羨しく思われたであろう。

夏目漱石は、1894(明治 27)年 12 月末、菅虎雄の紹介で鎌倉円覚寺に釈宗演^{しやくそうえん}を訪ね、その塔頭^{たつちゆう}帰源院の釈宗活の世話になった。漱石は宗演から与えられた公案に必死に取り組んで日夜呻吟したが、「^{*21} 五百生の野狐禅遂に本来の面目を撥出し来らず」、1895 年 1 月 7 日、空しく下山した。

菅虎雄は、1895 年 1 月、横浜の英字新聞『ジャパン・メール』の記者を志願した漱石を、同社の頭本元貞^{ずもともとさだ}に紹介してやった。採用試験として英語論文を出題されたので、漱石は禅について書いて提出し、理解されずに不採用になった。

菅はそれでも漱石を見捨てることができなかった。同年 4 月、漱石は愛媛県尋常中学校に月給 80 円で赴任する。この話を漱石に持ち込んだのは、菅虎雄であった。愛媛県参事官浅田知定(久留米市莊島町生)は同郷の菅に英語教師の推薦を依頼、菅はさっそく漱石に行ってみないか、と口をかけたところ、煩悶をすべて打ち明けて何もかも菅に頼る気になっていた漱石は、正岡子規の故郷でもある松山だったので、自己を流^る瀆^{てき}する気で承諾した。かくて「坊っちゃん」が生まれたのである。

1895(明治 28)年 8 月 31 日、熊本の五高講師、後に教授になった菅虎雄のところに、間もなく漱石から松山の不平を並べた手紙が盛んにやって来た。菅は自分が周旋^{はじめ}しただけに閉口していると、五高の中川元^{はじめ}校長が英語教師を探していたので、漱石を推薦した。

1896 年 4 月 13 日、水落露石^{みずおちるせき}(大阪の俳人)・武富瓦全^{たけとみがぜん}(露石の従弟)を連れた漱石は、池田駅(現・上熊本駅)に到着、人力車で京町の坂を登り、新坂あたりから眼下に市内を見下した時、「ああ森の都だな」と言ったそうだが、その文献はいまだ知らない。出迎えた菅虎雄と共に菅宅(熊本市薬園町 62 番地)に入り、下宿が^{ふつてい}払底していたので、数日ここに仮寓している。

4. 浅井・菅・漱石と禅

浅井栄熙は 1895(明治 28)年 6 月 28 日に五高英語科の授業を嘱託されており、菅虎雄は同年 8 月 31 日に五高独逸語及び論理学教授の嘱託を受けたので、夏期休暇を考慮に入れれば、ほぼ 1 ヶ月ほど浅井が先任ということになる。2 人は禅を通じて意気投合し、急速に親しくなった。熊本人である浅井は菅を臨済宗妙心寺派の見性禅寺(以下、見性寺と略す)に連れて行き、12 代住職葆岳宗寿に紹介した。そして 13 代住職^{*22} 宗般玄芳(京都八幡田福寺に転じて後松雲室と号した)の下に熱心に参禅した。

浅井栄熙が禅に入った経緯について、3 男・栄資氏の私宛書簡によると、1891 年貴族院を辞して帰郷後、若年からの胸部疾患が悪化し、生死の境を徘徊したとき、「死ぬなら、笑って死ぬようになりたい」と思い、杖にすがって、見性寺の宗般玄芳禅師を訪れ、来意を告げると、「それなら、これを読んで、まず身体をなおしなさい」と言われ、白隠禅師

の『夜船閑話』を渡された。1、2年間、熱心にその中の"数息観"という調身調息の健康法を修し、身体も大変快方に向かったので、それから真剣に禅修行をやったということである。

やがて、浅井の禅修行の進境著しく、「自哲」という居士号を授与されたが、それが何年のことであるか、不明である。禅の修行は生涯のことであるから、それは後年のことであるかも知れない。

夏目漱石が1896年4月、五高に赴任した時、下宿などいろいろ身の世話をしたのは、菅虎雄であったが、菅自身も前年9月に来たばかりで、熊本市内の細かい事情には疎かった。そこで熊本の地元の人である浅井栄熙がこまごまとした市井の雑事について世話をしたらしい。

小宮豊隆著『夏目漱石』(岩波書店)「32 結婚生活」には、「浅井栄熙は熊本見性寺の葆岳や松雲の弟子で、禅の方面で相当できた人だったといふが、是が菅虎雄を通じて漱石と知り合つてゐた」とあるように、浅井は禅を通じて菅と知り合い、次いで菅が漱石を紹介して、漱石も見性寺に打座を試みるようになったと思われる。ただ、現在の見性寺には、浅井栄熙・菅虎雄・夏目漱石3人が参禅したことを証するものはない。筆者宛の、住職阿部宗徹玄照禅師の御手紙によると、「見性寺の一切の記録物、書画は事情がありまして向ふ一〇年位御見せする事は出来ません」ということである。

岩波書店版『漱石全集』の中で「見性寺」が出てくるのはただ1度だけである。

小生近頃蔵書の石印一枚を刻して貰ひたり 章曰漾虚碧堂図書と 漾虚碧堂とは虚子と碧梧桐を合した様な堂号なれど是は春山疊乱青春水漾虚碧と申す句より取りたるものに候 刻者は伊底居士とて先般より久留米の梅林寺に滞留近頃当地見性寺の僧堂に参り居候もの 篆刻の余暇参禅の句風に余念なき様子 刻風は蘇爾宣篆法とかいふ奴を注文致候 頗る雅に出来致候一寸御覧に入度と存候へども肉を買はぬ故押す事が出来ず 次回に送るべし

(1896年11月15日付正岡子規宛漱石書簡)

これによれば、漱石は1896年後半には、見性寺に出入していたことが、うかがわれる。そして、それは菅虎雄・浅井栄熙を通じて見性寺に紹介され、伊底居士と親しくなったものと想像される。伊底居士については未詳であるが、北山正迪氏(光華女子大学教授。故人)によれば、北九州から来たらしい。私はかつて久留米市京町の梅林寺(臨濟宗妙心寺派九州第1の禅林道場)の「碧巖録会日単」(寺の日誌のようなもの)を調査したが、1896(明治29)年8月29日、9月7日の項に「伊底居士」の名が散見されるので、同年8月末、9月初め頃はまだ久留米の梅林寺にいたことがわかる。いつごろ熊本見性寺に行ったか未詳である。

ついでながら、久留米の梅林寺の「日単」を調査した結果、漱石が鏡子と共に同年9月初め、北部九州旅行を試みたと思われる8月28日より9月13日までの「日単」を写真に撮った範囲では、五高教授夏目金之助(漱石)の名は出ていない。漱石の[子規へ送りたる句稿17 40句]には、

梅林寺

碧巖を提唱す山内の夜ぞ長き

という句があるので、確かにこの旅行中、梅林寺に寄ったことは明らかである。なお、梅林寺は菅虎雄の家の菩提寺であるから、この時、菅虎雄の紹介状を持って、住職・²³ 猷禅玄達を訪ねたかも知れない。念のため、漱石が久留米に来たと思われるその外の4回(① 1896年4月、② 1897年3、4月、③ 1897年11月、④ 1899年1月)について調べてみたが、「日単」に夏目金之助の名を見出すことはできなかった。

5. 小宮豊隆『夏目漱石』の誤り

1897(明治30)年3月31日、浅井栄熙は第五高等学校を願いに依り囑託を解かれた。夏目漱石と同僚として五高に勤務したのは、わずか満1年間であったが、その後も、2人の交友は禅を通じて続いていた。

一方、菅虎雄は、同年5月24日、第五高等学校舎監の兼任を命ぜられたが、やがて胸患を病み、同年8月14日には非職(官吏の地位はそのまま、職務だけ免ぜられること。後の休職)を命ぜられた。小宮豊隆著『夏目漱石』(岩波書店)「31 旅行」に、

翌明治三十年(1897)四月十八日子規宛の手紙に、漱石は「今春期休に久留米に至り高良山に登り夫より山越を致し発心と申す処の桜を見物致候 帰途久留米の古道具屋にて士朗と淡々の軸を手に入候につき御慰の為め進呈致候…」と書いてゐる。是は親友の菅虎雄が病気の為め五高を辞して、郷里久留米に引き籠つたのを、見舞ふための旅行であつた。

とあるが、これには2ヶ所誤りがあると思われる。その1つは、前述のように8月に非職になったのであって、4月・5月はまだ元気で勤務していて、辞職はしていないことである。熊本大学文学部保管の旧制第五高等学校の記録「職員出欠表」によると、菅虎雄は、3月は「皆出」、4月も「皆出」、5月も「皆出」とあって、3ヶ月間1日も休んでいない。

そして、6月に「廿三日」欠勤しているので、菅の病気は6月に発病している。従って、誤りのその2つは、菅は春期休暇中まだ病気をしていないということである。ただ、春期休暇中であるから、久留米に帰省はしていたであろう。久留米市呉服町には父・京山と母・テイが健在であった。だから、漱石の久留米訪問は菅虎雄の病気見舞ではなく、他の目的のためであろう。この時の高良山・発心登山が後の『草枕』に素材として活かされた。

6. スキャンダルもみ消し運動

1898(明治31)年6月か7月の梅雨時、鏡子の入水事件が起きたことは、既に述べた。浅井栄熙がこの事件の新聞三面記事にならないように尽力したことは、小宮豊隆の『夏目漱石』(岩波書店)によって周知のところである。では、浅井栄熙がどのようなルートを使って、スキャンダルにならぬよう奔走したのだろうか。

浅井栄熙の父・鼎泉(1826～1898)は熊本細川藩士浅井新右衛門廉次の長男で、1841(天

保 12)年父の死により御番方に出仕、御擬作百石を受ける。 1846(弘化 3)年時習館居寮生となり、その後、同句読師・若殿付近習・物頭列と進み、長州征伐には世子細川護美もりよしに随行して小倉へ出征した。その後、京都留守居・副奉行・用人兼務などを務め、勤皇佐幕の藩内議論沸騰していた時、藩主細川韶邦よしくに・護久たすを扶けて、勤皇に藩是を定むるに功があった。討幕戦には軍資金の調達に尽力した。よって、禄三百石に加増六百五十石、併せて九百五十石を食む肥後藩の重職の 1 人に列していた。 1868(明治元)年辞職。細川家家扶となり地方給与の百五十石を賜う。 1877 年には熊本における最初の銀行、国立第九銀行の創設に努力して、禄を離れた士族の共済を図るとともに大いに地方の殖産興業に努め、自らは次男・中村友雄をして熊本市宇留毛に、熊本で最初の牧場を経営せしめた。また、文教の振興にも大いに努力し、1882 年 2 月、佐々友房の済々黌設置にも尽力した。

そのように父・鼎泉の関係もあって、栄熙は 1883 年 9 月、済々黌せいせいこうの英語教師になった。 1884 年、大分県西国東郡草地村生まれの数え年 20 歳になる^{*24} 山田珠一やまだしゆいち(1865 ~ 1934)という青年が、村の老儒鴛海の涵養義塾を卒えて、佐々友房(克堂)の人徳を慕い、熊本に来て済々黌に入学した。初め 3 級に編入されたが、あまり学問ができるので、2 級飛んで 1 級に編入された。

浅井栄熙はこの時、既に英語教師だったので、山田を教えたと思われるが、その確証はない。当時安達謙蔵(後に内務大臣)が生長(生徒の方で舎監のような仕事もする)、山田珠一の同級てるおには狩野直喜(後に京大教授)、野田寛(初代県立熊本中学校長)、1 級下には鳥居赫雄そせん(素川と号す。大阪朝日新聞主筆、漱石入社に尽力)、井手三郎(上海日報社経営、代議士)、熊谷直亮なおすけ(新聞記者)、西住有斐などがいた。

山田珠一は 1886 年卒業と同時に、佐々友房・津田静一・古荘嘉門(いずれも済々黌教師)らの経営する紫溟会の機関誌『紫溟新報』しめいに月給 5 円で入社した。浅井もこの年、済々黌を辞職した。やがて『紫溟新報』は『九州日々新聞』となり、浅山知定社長を助けて社業の発達に力を尽くした。 1892 年、佐々友房社長の後を継いで、4 代目の社長に就任した。時に数え年 28 歳であった。九州日々新聞社長のまま、1896 年 8 月、国権党(紫溟会の後身紫溟学会の組織の中の政党)常務委員となり、鏡子入水事件のあった 1898 年には熊本市会議員となっていた。浅井栄熙と山田珠一とは、済々黌時代の 6 歳違いの子弟の関係にある。鏡子入水事件の時、浅井が人力車を走らせて、新聞社に記事を伏せさせに行く途中、出会った当時済々黌教諭野田寛は、山田珠一の済々黌生徒時代の同級生である。しかも、山田は熊本第一の大新聞『九州日々新聞』の社長であり、熊本市会議員である。熊本の新聞記事でスキャンダルにならないようなもみ消し運動をする相手としては、これ以上の人物はいない。浅井と山田がその後も交流があったことは、3 男・栄資氏所蔵の「^{*25} 故浅井栄熙の葬儀に際して弔辞 熊本市長山田珠一」によって明らかである。

浅井栄熙が鏡子入水事件もみ消しのため山田珠一に働きかけたという直接資料は、今のところ何もない。しかし、2 人の交流関係や報道関係の立場を考えると、状況証拠はそろっていると言える。

熊本はジャーナリズムで活躍した人材を多く出している。徳富蘇峰・蘆花は肥後の先輩として父・浅井鼎泉を兄事していた。徳富兄弟の生地は水俣で、栄熙の姉・志計が水俣の名家深水頼寛よりひろに嫁していた関係があるかも知れない。 1898 年 6、7 月の当時、蘇峰は東京で『国民新聞』『国民之友』『家庭雑誌』を社長兼主筆として発行していたので、

この時浅井との交渉は考えられない。蘆花も神奈川県逗子の柳屋に住み、『国民新聞』『国民之友』に作品を発表して、浅井との交りはない。

池辺三山(吉太郎)は夏目漱石が敬愛した『東京朝日新聞』主筆で、西郷隆盛を連想させる三山の人物に惚れ込んで漱石は『朝日新聞』に入社した。この池辺三山は、西南の役で西郷軍に加担した池辺吉十郎の長男で、1864(元治元)年、熊本市京町宇土小路で生まれた。浅井栄熙より5歳年下で、明治10年父の刑死後、国友昌(古照軒)の塾に入っているが、浅井栄熙も明治4年3月から国友昌家塾で学んでいるので、先輩に当る。三山は1881(明治14)年1月上京、中村敬宇(正直)の同人社に入ったが、その時、浅井栄熙も1879年6月から同人社に学んでいた。浅井栄熙は1881年12月に同人社普通英語科を卒業したが、池辺三山も1年足らずで去り、慶應義塾に入学しているため、浅井・三山の交友も1年足らずであったろう。1892年7月、旧藩主細川護久より懇望されて、パリ留学中の世子護成の輔導役として、渡欧する。浅井栄資氏書簡によると、パリ留学中の池辺三山より浅井栄熙宛の世子護成の近況を報ずる手紙を、父・栄熙から見せてもらい、その文章と文字のうまさに感心したことがあるとのことだ。そして1898年6、7月ごろ、三山は『大阪朝日新聞』主筆とを兼務し、東京にいたので、これも浅井が三山に助力を乞うことはない。

次に鳥居素川(赫雄)は熊本市本荘町に1867(慶応3)年に生まれているから、漱石と同年代である。1882年、済々黌に入学し、翌年9月、浅井栄熙が済々黌英語科教師となった。

1884年鳥居は済々黌を卒業しているから、あるいは、浅井栄熙から直接英語を習ったかも知れない。浅井が済々黌を辞職したのは1886年8月である。1897年、鳥居は郷土の先輩池辺三山の推薦により、日本新聞社から『大阪朝日新聞』に入社した。1898年6、7月当時は大阪にいたので、浅井が鳥居に相談をもちかける必要はない。1906年のある日、鳥居は芦屋の浜に近い小川の片ほとりに寝転んで漱石の『草枕』を読んで大いに感心し、漱石を朝日新聞社に招聘したいという考えが脳裏にひらめいた。それから、『草枕』を村山龍平社長に読ませ、池辺三山と共に村山社長に漱石招聘の議を提案したのである。

1907年4月、漱石は帝国大学教授の椅子を目前にしなが、それを捨てて、朝日新聞社に身を投じた。人材を朝日に吸収するに熱心だった鳥居素川の一大卓見というべきであろう。このように考えると、当時、熊本にいなかった徳富兄弟・池辺三山・鳥居素川を除外しなければならず、結局、かつての教え子『九州日々新聞』社長山田珠一に三面記事不掲載を働きかけたことは間違いないと思う。

ただ、1898年7月7日、父の鼎泉が73歳で亡くなっており、ちょうど鏡子入水の直後ぐらいではないかと思われる。したがって、内には臨終間近い病臥の父をかかえ、外には友人夏目漱石夫人自殺事件のもみ消し運動で奔走して、内憂外患の状態であったろう。

7. 浅井の生活支援

夏目鏡子の入水事件は浅井栄熙の尽力で、何とか内輪に留めることができた。この事件について、当の鏡子は『漱石の思ひ出』の中では全然触れていない。やはり心の傷跡として、触れたくない部分だったのであろう。松岡譲も1934(昭和9)年11月発行の『漱石先生』(岩波書店)の「漱石のあとを訪ねて」では、入水事件を故意に避けているが、1967年5月発行の『あゝ漱石山房』(朝日新聞社)の「漱石のあとを訪ねて」では、「前夜、野々口教授からきいた、悪阻からひどいヒステリーをおこした若い義母が入水しようとしたというの

は、大方この家に違いない。彼女にとっても余り思い出のよい家ではなかったに違いない」と挿入されている。

浅井栄資氏によると、浅井栄熙は土地に不案内な夏目漱石のため、住宅の世話をしたり、気心の知れた女中を世話したりしたと、母・政^{まさ}から聞いておられた由である。そこで漱石に貸家の世話をした家はどれであったか、お聞きしたが、はっきりしたことはわからない。ただ、井川淵町には、浅井栄熙の妹・真寿^{まじゆ}が会田由義(熊本県立熊本高等女学校初代校長)と結婚して住んでいたのも、土地の事情には詳しくはなかったはずだ。この井川淵町の家は、1898年3月末か4月初め、家主落合為誠^{ためのぶとうかく}(東郭)が宮内省皇太子(大正天皇)傅育官を辞職して帰郷したため、急遽大江村から転居せざるを得なくなったもので、やはり心安く頼める土地にくわしい浅井栄熙の手を煩わせたと考えてもおかしくない。ところが、一時凌ぎの井川淵町の家で入水騒ぎが起きた。白川に面した危険な家を周旋した浅井としては、不慮の事故の責任を痛感したであろう、7月には内坪井町の家を世話したのではないかと、栄資氏は推定しておられる。内坪井町は白川からも離れており、近くの坪井川も小さな川で入水の心配はない。ここも栄熙の知人が多数住んでおり、妹・真寿の会田一家が後に1909年ごろ住んでいた。事件の責任を感じている点、土地に通じている点を考えると、浅井栄熙が世話をした可能性もあるが、夏目鏡子の『漱石の思ひ出』の「秋狩野さんのをられた家があいたので、さつそく内坪井町の家に移りました」が確実だとすると、浅井の周旋は消えるだろう。ただ、その直前に「この春狩野亨吉さんが五高に来られまして、狩野さん、菅さん、山川さんなんぞ、昔からのお友達が沢山集まりました」とあるが、菅虎雄は前年8月に五高を非職になっているので、1898年春には熊本にいない。このような多少混乱した記載があるので、はっきりしたことはわからない。もしかりに、浅井栄熙が漱石に貸家の世話をしたことが確かならば、井川淵町と内坪井町の家が最も可能性が強いとだけ言っておこう。

浅井栄熙が漱石に世話した女中については、栄資氏は母から聞いたことばとして、「夏目家に世話した女中は、我家に長くいたとめ、とよという姉妹の女中のうち姉のとめを世話したと聞いております。大正四、五年頃までは二人ともわが家に出入りしていましたが、その後音信不通でわかりません。姉のとめは結婚して子供も私と同年配の男の人がありましたが、妹のとよは独身で熊本新屋敷の裏に駄菓子屋を営んでおりました」という御手紙をお寄せ下さった。

熊本での夏目家の女中としては、松島とくという老女がいる。荒正人著増補改訂『漱石研究年表』(集英社、1984年5月30日)の1896(明治29)年5月4日の項を見ると、「熊本市下通町一〇三番地」(現・熊本市下通町1丁目7番16号または17号、光琳寺町として伝えられる)に一戸を構える。(熊本での第2回めの住所)。庭は、青桐と椋の木がある。家賃は八円。松島とくという老女に家事を手伝って貰う。(松島とくは長女筆の生れるまでいる)」とある。大江村の縁先で撮影した写真(松岡讓『漱石写真帖』43。左から土屋忠治、漱石、鏡子、松島トク)に写っている人である。

熊本の夏目家にテルという女中がいた。鏡子は、

その女中はテルといふ名で、色の浅黒い二十七、八の女でしたが、よく忠実に働いてくれるのはいいが、これが私に負けない大層な朝寝坊です。で私の留守中朝飯も

たべさせずに学校へ出したことがしばしばあつたさうですが、さうすると旦那さんに申し訳がないとあつて、帰つて来て夏目が御飯をたべてしまふまで決して自分でも箸をとらないのです。庭に小さい祠がありましたが、テルがその神様に線香を上げ蠟燭を上げてしきりに拝んでをります。一心に願かけでもしてゐる様子ですから、いい旦那でも欲しいのかと夏目が冗談にたづねてみますと、どうぞ朝起きになれますやうにと殊勝なお祈りをしてゐるのでした。(夏目鏡子『漱石の思ひ出』6 上京)

と書いている。その他にもユーモラスなテルの話の鏡子は語っている。また、合羽町の家同居していた五高の史学科教授だった長谷川貞一郎もテルについて、

それからあの頃夏目君の家におてるといふ女中がゐましたが、奥さんよりはずつと年上で、二十七、八でしたから、今生きていたら七〇歳以上でせう。あの女中が今なほ存命でしたら、夏目君の日常生活については、随分いろんな面白い材料を持ち合せているでせうよ。え、^{がんじょう}岩 畳な体格をしてゐる癖に臆病で、一人で留守番することを怖がつたものです。何でも八代辺から来てゐたとかいふことで、主思ひの忠実に働く女でしたがもう死んだかも知れませんね。(岩波書店『漱石全集』別巻(1996年2月6日)「熊本時代の漱石と米山天然居士」(1936年7月)長谷川貞一郎)

と語って懐かしがっている。長谷川が知っているのも、合羽町当時(1896年9月～97年7月)既にテルは夏目家に雇われていたのである。そして漱石が熊本を離れるまでいた。鏡子も長谷川貞一郎も姓を書かず、名だけテルと記しているのも、調査が困難である。

その他に、鏡子が結婚の時、東京から連れて来た年とった女中がしばらくいたが、やがて東京に帰った。

そこで、浅井栄熙の世話した女中とは、どの女だろうか。栄資氏の書かれた「とめ」という女中は鏡子の『漱石の思ひ出』の中に出てこない。もしかしたら「松島トク」が「とめ」と誤って記憶されたものか。あるいは短期間だったので、鏡子の印象に残っていないものか、はっきりしない。

8. 事件の後

1898(明治31)年梅雨時の入水事件後、夏目漱石は川の側を避けて、7月に熊本市内内坪井78番地に転居した。前述のように浅井栄熙の紹介であるかどうか未詳である。

浅井氏には時々面会御噂致居候 過日御来示の俳句数首日本新聞へ寄送致候処夏季
切後にて掲載の運びに至らず 其後三池生より礼状到来初めて同人の句なるを知り
申候 近頃は頓と俳句も作り不申 暑中は少々奮発打坐を試み候処些の入処も無之其内
運動不足の爲め下痢を催ふし夫より昨今に至りては始業間近く相成候爲め夫なりに放
却致候 御憫笑可被下候 法語々録の類数種披見致し候が少しの得に御座候へども画餅
不充饑依然たる瞳酒糟の漢なるには閉口致候

(1898年9月3日付菅虎雄宛漱石書簡)

鏡子の入水事件以後、夏目漱石はますます浅井栄熙との結び付きが深まった。温厚篤実な浅井栄熙の性格は、神経過敏になっている漱石の心をなごませてくれた。父・鼎泉の創設した第九銀行の監査役になった栄熙は、余り健康もすぐれず、経営の中枢にはおらずに閑職だったので、時間は比較的自由だったのだろう。時々、漱石宅を訪問し、菅虎雄の噂話をしていた。

前年8月、菅は肺患を患い五高を非職になり、久留米で療養したり、茅ヶ崎で病を養っているうちに、健康も回復したので、1898年9月5日、第一高等学校独逸語の授業を囑託され、報酬として1個年900円を贈与された。住居は東京市神田区錦町の^{*26}大西克^{よしあきら}知眼科医院(菅虎雄の妹・孝代の夫)に寄寓していた。

「近頃は頓と俳句も作り不申」はやはり入水事件のショックの後遺症であろうか。^{*27}1897(明治30)年の作句数266句、31年の102句、32年の330句と比較してみると、入水前後の6、7、8、9月初めごろは空白となっている。[子規に送りたる句稿]は5月頃の次は9月28日のものに飛んでいる。

「打坐^{たざ}」は浅井栄熙の影響なしには考えられない。浅井栄熙に誘われて、見性寺に参禅し、心頭の煩悩を滅却させようと、呻吟した。小宮豊隆の『夏目漱石』にも、

熊本では漱石が松雲から公案をもらつたといふ伝へがあるといふが、もしそれが事実なら、或はこの年のことではなかつたかと思はれる。勿論それは浅井の手引だつたに違ひないのである。(32 結婚生活)

とあり、見性寺住職・宗般玄芳(「松雲」は京都八幡田福寺に転じて後の室号)から公案をもらつたかどうか、今となってはわからない。見性寺の記録は前述のように未公開であるが、やがて公開されれば、手掛かりがつかめるかも知れない。漱石の作品中に出てくる公案としては、「門」18に出てくる「父母未生以前本来の面目」と『夢十夜』第二夜に出てくる「趙州曰く無」(「色気を去れよ」にも「趙州の無字を公案として授かった。」とある)の公案が知られているが、もし見性寺の宗般玄芳から公案をもらつたとすれば、どんな公案だったのだろうか。

「法語々録」を数種類読んだようであるが、これらは浅井栄熙が貸した可能性が強い。しかし、どういう本であったか、わからない。

夏目鏡子は、1898年秋、妊娠して猛烈な悪阻に悩まされ続けた。それは9月から始まり11月まで続き、激しい時には、食べ物や薬はおろか、水さえ咽喉に通らず、衰弱は日増しに加わるのでやっとなり滋養浣腸ぐらいで命をつないでいる状態だった。

漱石は妻の衝動的な発作を恐れたが、不安とともに可愛想に思い、できるだけ慈愛をかけいとおしんだ。

「病妻^{ねや}の閨に灯ともし暮るる秋」の句は、1898年9月末の作であった。

9. 黒本^{かどう}稼堂(植)と浅井栄熙

菅虎雄は熊本を去ったが、夏目漱石・浅井栄熙と禅との関係に深いつながりのある人物がもう1人いる。それは第五高等学校教授^{*28}黒本植^{しよく}(号・稼堂)である。1978年、夏目漱石が五高職員総代として読んだ、1897(明治30)年10月10日の開校記念日における「夫レ教

育ハ建国ノ基礎ニシテ子弟ノ我熟ハ育英ノ大本タリ」で始まる「祝辞」は、実は黒本植の代筆で、代筆の疑いもあるという^{*29}説が提出された。代筆・代筆説を論ずることはこの際、本意ではないので、一応措くとして、黒本植に触れておきたい。

黒本植は^{*30}加賀国石川郡宮腰村の人、銭屋与右衛門の第5子として1858(安政5)年2月10日生まれた。生後間もなく石川郡専光寺村の黒本八兵衛の養子となった。幼名は栄太郎といった。金沢、大阪、東京の私塾で漢学・和文・英学を修業し、石川県中学校西校、石川県師範学校に入り、学んだ。1881(明治14)年栃木県第一中学校助教諭から始めて、石川県尋常師範学校、石川県私立金沢学校、第四高等中学校、大分県尋常師範学校を経て、1893年11月、第五高等中学校助教諭に任ぜられた。浅井栄熙・菅虎雄より2年余り早く、漱石より3年余り早く赴任したことになる。五高教授昇格は、菅が1895年10月3日、黒本が1896年6月8日、漱石が同年7月9日付で、黒本は漱石より1ヶ月先任教授である。しかし、「^{*31}第五高等学校職員調 明治29年9月現在」によると、菅虎雄、漱石ともに高等官6等の教授で5級俸年額1200円を支給されているのに対して、黒本植は高等官8等の教授で年俸480円であった。

1892年春の「^{*32}四高騒動」では校長中川元より12名(うち石川県人の非学士が9名)が非職になったが、黒本植はこの騒動に巻き込まれて一旦非職となり、大分尋常師範学校教諭となり、1893年11月、同じ五高校長になった中川元から、再び拾われて、和漢作文の指導を命ぜられた。黒本は1896年8月10日に非職を命ぜられ、1897年4月8日に五高に復職を命ぜられ、1898年8月23日に五高舎監を兼任し、1899年12月28日、依願免官になった。

黒本と漱石は五高において約3年間同僚として互に交遊した。黒本は古い時代の漢学者風の文人であり、近代西洋的な合理主義的的科学的方法による学問を志向する生徒には理解されない面があったらしい。資性実直、道学者的古武士の風格を持っていたという。『稼堂集』・『稼堂叢書』(全24巻)・歌集『花守集』など多数の著作があり、蔵書4600余冊は、「稼堂文庫」と名付けられて、金沢市立図書館に寄附された。『稼堂叢書』(稼堂叢書刊行会)の中に「肥後異人談」(1932年10月1日)という1巻があるが、その中に、「浅井交翠」という1項目があり、浅井栄熙(「交翠」はその齋号)を直接評した文章なので、全文引用してみる。

浅井交翠ハ、浅井鼎泉カ嫡ニシテ、名ハ栄熙、交翠ハ、ソノ齋号ナリ、モト第五高等学校習学寮ノ主任タリシカトモ、職員ト議ノ合ハザル所アリテ、ソノ職ヲ辞シ、今ハ亡父ノアトヲツギテ、熊本銀行ノ鑑査役トナレリ、常ニ禅味ニ耽リテ、見性寺ノ宗般和尚ニ参シ、一世ノ外ニ超然タリ、サレトモ、天性慷慨ニシテ、逢ヘハ乃チ世ヲ憂ヒ、時ヲ慨シ、道德ノ日ニ衰ヘテ、子弟ノ月ニアシクナルヲ嘆キ、オノレニ書院ヲ設ケテ、当地ノ子弟ヲ集メ、一ノ模範ヲ示シテヨト乞フ、ソノ比、交翠カ親族ノ葦北郡水俣村ニアル者ナトノ子弟ヲ、先五六人合セテ、膝下ニオキ、トクト教テモラヒタシトノ頼モアリ、カタ々々然ルヘキ家ヲ、ト諸所尋ネツレトモ、書院ニ適スル家モナク、荏苒日ヲ送り、三十二年ニ至テ、漸ク北坪井ニテ、家ヲ一軒借り、宏済書院ト名ヲ命シ、水俣ノ子弟ヲ初メ、十人斗集メテ、教フルコトトセリ、時ニ友人尾関義山阿波ノ人、名ハ甲子太郎ガ助力ヲ得テ、オノレハ一週ニ一回ツヽ講話ニユキヌ、帰国ノ後ハ、

講話スル者モナリナリシカトモ、交翠ト義山トノ世話ニテ、連綿教育セリ、カクノコトク、常ニ教育ニ心ヲ用ツレトモ、壯年ヨリ病身トナレハ、意ノコトクナラス、ヲシムヘシ、ソノ書齋ニ、王治本カ書ケル環翠舎ノ額ヲカク、オノレ尋ヌルコトニ、是カ目ニサハレハ、一日モハヤクオロスヘシ、カカル者ヲカケテ、詠ムルコソ、奇怪ナレトイヘハ、苦笑シテ云、是ハ亡父カカケテオキシ物ナレハ、意ニ任セカタシ、オノレ云、三年父ノ道ヲ改メストハ、親ノヨキ道ヲ云也、其悪シキヲ改ムトテ、何ソ孝ノ道ニ背カンヤ、ト言争テ大笑セリ、ソノ後、藩儒片岡朱陵ノ書ケル交翠園ノ三字ヲ得タレハ、是ヲ額ニ掲クヘシトテ、遣ハス、交翠大ニ喜テ、表装シテ、其ヨリ交翠園主人ト号セシ也、交翠モ、茶道ニ入り、時々オノレトモヲ招テ茶会ヲ開ク、庭樹緑滴リテ、石上常ニ湿ヘリ、

(黒本稼堂「肥後異人談」下之巻)

これによれば、浅井栄熙が五高退職後、北坪井町に開いた私塾の宏済書院に、黒本も週1回講演に出ている。2人の間には互に心を許し合える暖いものが流れていた。黒本は漢学を専攻し、浅井は英語を専攻する専門教科の違いはあっても、2人は帝国大学を卒業していない「非学士」であった。そして、人心衰微し、世相荒廃するのを悲憤慷慨する慨世家として、一致していたらしい。

黒本植が見性寺に参禅していた証拠はないが、宗般玄芳が円福寺に転じて後、黒本は宗般を訪ねて、熊本時代に³³「入魂^{じっこん}」だったと書いている。光華女子大学教授だった³⁴故北山正迪氏は、夏目漱石、菅虎雄、黒本植、浅井栄熙を結ぶ一本の糸を「見性禅寺グループ」と位置づけておられた。

黒本植と浅井とが五高で同僚として接した期間は、黒本非職期間を除くと、1895(明治28)年6月(浅井就任)から96年8月(黒本非職)までの実質1年間に過ぎない。しかし、先の黒本の「肥後異人談」や、黒本宛漱石書簡を読むと、その交遊は浅井が退職して後の方が一層深まり、肝胆相照らす仲だったように思える。「肥後異人談」の執筆の時期は1899年12月、免官になって帰郷した早いころか。

10. 韓国における浅井栄熙

1900(明治33)年5月12日、五高教授夏目金之助(漱石)は在官のまま、英語研究の目的で、文部省第1回給費留学生として、年額1800円の留学費を支給され、2個年間イギリス留学を命じられた。漱石は一先ず家族も一緒に東京に帰そうと思ひ、熊本を離れることにした。この時、おそらく2度と熊本に帰る気はなかったのであろう。家財道具は懇意にしている者に置土産として分けてきた。³⁵その中で松山時代より持っていた、廻りと足とが竹でできている紫檀の机を、浅井栄熙に贈った。

この机について、浅井栄資氏にお尋ねしたところ、次のような御返事があった。

書簡や贈られた机など残っていません。但し机は私の子供の頃余り大きくない黒ずんだ長方形の机があったことを覚えておりますが、一家を挙げて朝鮮移住などの折り、かさばるものは他人に贈ったり処分したりしてしまいましたので、私が中学に進んだ頃(大正元年)は覚えがありません。

(私宛浅井栄資氏書簡)

おそらく、1909年4月の朝鮮移住の際、他の家財道具とともに処分されたのだろう。漱石が最も愛用したと思われる机を、五高を去って3年以上にもなる浅井に贈ったところに、漱石と浅井の親密さを見ることができる。

1909(明治42)年9月2日(木)、夏目漱石は、東京大学予備門予科以来の友人、今は南満洲鉄道株式会社総裁の中村是公よしことから誘われ、新橋停車場発急行列車で満洲へ向け出発した。漱石はこの満韓旅行で実にさまざまな旧友知己と再会している。その紀行文『満韓ところどころ』は、当時『満韓ところどころ』ではなくて『漱石ところどころ』であると評されたほど、満韓の自然風物よりも、満韓で出会った漱石の旧友知己の懐旧談で持ちきった紀行文であった。

満洲(現・中国東北部)を回って、9月28日(火)、安東(現・中国遼寧省丹東市)から小蒸気で鴨緑江を渡り、朝鮮の新義州ピョンヤンに上陸、平壤キョンソンに到着する。9月30日(木)、京城(現・ソウル)に到着した。

京城に着いて7日目の10月6日(水)、漱石はかつて五高で同僚だった浅井栄熙を訪ねた。

引き返して太平町の郵便局に浅井栄熙を訪ふ。先生三等郵便局の主人たり。膝を容るゝとは正に是なり。余と陶山さんと這入つたらあとは何うする事も出来ない。浅井さん大いに喜ぶ。其顔を見たのが甚だ愉快であった。

(1909年10月6日付漱石日記)

想像するに、漱石が京城に来たことを新聞か何かで知った浅井栄熙は、往時を追懐して懐旧もたの情然し難く、電話か何かを掛けて、住居を知らせたのではあるまいか。そして、漱石の来駕を乞うたのではあるまいか。漱石が留学のため上京以来、9年ぶりの再会に2人の喜びが、手に取るように想像される。

栄資氏書簡によると、3等郵便局というのは、今でいう特殊郵便局で、当時は「郵便所」といったらしいとのことである。浅井栄熙の家は南大門近くの太平町にある朝鮮家屋で、朝鮮人相手の質屋を兼ねていた。表が事務所、裏が住宅であったそうだが、漱石が浅井と会ったのは事務所の方だったのだろう。小学4年生だった栄資氏は住宅におられたらしく、漱石と会った記憶はないということだ。もし会っておられたとしても、小学4年生の目には文豪漱石も鮮明な記憶として残らないのが、当然だろう。

浅井栄熙一家が京城を去ったのは、漱石の浅井家訪問から1、2ヶ月後の秋だったらしい。栄資氏の記憶によると、菊が咲いていたり、町角で韓国人少年が焼栗を売っていたり、朝は薄霜が屋根に見えたり、帰国前にはオンドルを既に焚いていたのが印象に残っているので、10月か11月ごろだろうということである。

11 稼堂の『師友簡録』より

黒本植(稼堂)が自分に来た書簡を丹念に筆録したものに『³⁶師友簡録』(乾・坤・拾遺 続編の3冊)がある。黒本稼堂研究家・桑山周一氏(元・石川県立金沢桜丘高等学校教諭)の御連絡によると、約100名の書簡が収録されており、夏目漱石・中川元・熊本関係者5名が含まれているようだ。『師友簡録』に収録された黒本植宛の漱石書簡は、1911(明治44)年3月7日

付で、学位辞退について黒本が褒詞を出したのに対する返礼である。既に岩波書店『漱石全集』第23巻「書簡 中」(1996年9月19日)に収録されている。

黒本植宛の浅井栄熙書簡は2通あり、その1は熊本地方の1796(寛政8)年以来の大洪水に対する黒本植の水害見舞の御礼の手紙である。封筒がないので、日付の消印、受取人住所、差出人住所ともに不明である(桑山周一氏の解説による)。

久敷御無沙汰申上候処愈御清康奉賀候 扱先月十六日ノ洪水御見舞として態々御念書被成下候へとも今日迄御返翰も届兼候段何卒御寛恕被下度奉願候 此度之洪水ハ実ニ寛政八辰歳以来之大洪水ニて市中三分二程浸水し一時ハ惨状ヲ極候へとも浸水之時間極短かりし故案外被害ハ少ク候キ 小生宅杯も門前より邸中三分一ほど押水参候へとも幸ニ何ノ別状も無御座候ニ付此儀ハ御安心被成下度奉願候 熊本市ニて悲惨之最甚敷かりしハ子飼橋際白川の左岸ニて候キ十数軒之家ニて此中流出ヲ免かれしハ僅ニ三軒のみ 他はミナ流出一家夫妻ニ子供四人ありし中ニ夫ト長子トノミ屋根によち登里て万死に一生を得 妻と三人の子供トハ家と共に流其死体サへ分明ならず聞さへ肌ニ粟ヲ生する杯ノ話のみ有之候 宏済書院ハ生憎増員即今ノ家にてハ狭隘ヲ感候ニ付櫛山なる永田ト申仁ノ家 船橋の堀部が世話 に移転之筈ニ御座候 即今尾関氏ハ帰省中ニて小生も去月末より当三角港ニ一家を挙て海水浴ニ罷在候 桜井校長も同敷夫人子供方一同等港ニ滞在被居候 当地ハ当年之暑熱例年ニナキ処ニて熊本市ハ九十七八度ニ及候処モ有之候 併し一昨日之暴風雨後ハ俄冷涼ヲ覚候様相成候 先ハ乍延引御見舞ノ御礼迄匆々申上候 謹言

八月廿一日

黒本大人 玉案下

浅井栄熙

(黒本稼堂『師友簡録』坤)

本文末尾の「八月廿一日」は分明であるから、黒本が去った1900年から1906年までの7月の降雨量の多い年を³⁷調査してみると、1900年7月6日が134ミリ、10日146ミリ、16日120・5ミリで、他の年に比較して圧倒的に多量の降雨をみていることが、わかった。従って、この手紙は、黒本植が1899年12月28日、五高を免官になって帰郷した翌年、つまり1900年8月21日のものである。この7月、五高教授夏目金之助(漱石)が、英国留学の命を受け、熊本を去っているが、鏡子は「熊本から帰京する道すがら、それは7月でしたが、丁度大洪水のあつた後で、至るところで汽車が不通になってゐて、歩いて連絡したことを覚えてをります。」(『漱石の思ひ出』13 洋行)と述べているので、1900年の大洪水の時であることに間違いない。ただ、浅井栄熙が共通の知己である漱石の留学・離熊のことに触れていないのは不思議である。

その2は、京都市大徳寺にいた黒本植に名産大徳寺納豆を送ってくれるよう依頼した手紙である。

拜啓 酷寒之候益々御清康奉賀候 先日ハ御題之御詠御示被下難有拜誦仕候 扱小生事旧臘中旬より病氣にて相臥申候処今ニ全快不仕漸ク昨今ニ至り粥をすゝ里申候 一時ハ非常ニ難渋仕候 病症ハ純然たる腸胃病にてチブスのやうにも非

ず最早快復期^(ママ)に向ひ日々転快ニ趣候間御氣遣被下間敷候 而ハ近頃甚願兼候へ
共御地名産大徳寺納豆少許御送附被下ましく哉 失礼ながら其料として別帋為
替券さし上候間よろしく御領収可被下候 恐惶謹言

一月廿七日

浅井栄熙

黒本植殿

追而 高井観厚殿ニハ本文之趣貴下より御伝声被下度御願申上候代筆ノ儀ハ平
に御海容可被下候 以上

(黒本稼堂『師友簡録』坤(拾遺))

栄資氏書簡によると、栄資氏が小学校 5、6 年のころ、従って 1910、11(明治 43、44)年
ごろ、栄熙が胃腸を患って静養していたことを御記憶とのことである。すると、1911 年 1
月 27 日付と思われる。黒本植の覚書と思われる「浅井栄熙 熊本人横手村北岡住」とい
う語句が冒頭に付けられているので、横手村北岡に住んでいた当時の手紙である。つま
り、1909 年 10 月か 11 月ごろ、朝鮮から帰って、熊本市郊外横手村北岡の細川家家政所(細
川家霊廟)に住んでいた。1912(大正元)年秋には東京家政所に移っているの、1910 年か
ら 12 年までの可能性があるが、栄資氏の言われるように、1911 年のものであろう。一
方、黒本植は 1904 年 3 月 31 日京都府師範学校に任ぜられ、1912 年 3 月 31 日には京都府
第一中学校教諭に転じ、1916(大正 5)年 8 月 19 日依願免本職、同年 9 月 1 日より嘱託に移
り、1922 年 3 月 31 日京都一中の嘱託を解かれ、朝鮮総督府京城公立中学校講師になって
朝鮮京城に渡った。黒本が浅井の手紙を受け取った 1911 年 1 月は、京都師範教諭時代で
あって、1911 年 3 月 7 日付黒本植宛漱石書簡の宛先は、「京都大徳寺中黄梅院」となっ
ていて、大徳寺に住んでいた。浅井が大徳寺納豆を依頼したのも首肯^{しゅこん}できる。

黒本植のいた大徳寺(臨濟宗大徳寺派総本山)黄梅院は 1588(天正 16)年小早川隆景の創建、方
丈造りの本堂は桃山時代初期の建築で、豪華な彫刻がある。「大徳寺納豆」は普通の糸引
納豆とは違い、黒い小粒で塩辛く独特の風味がある。黒本が大徳寺に仮寓したのは、や
はり臨濟宗の禅を修行していたからであろうか。

見性寺の住職だった宗般玄芳は、1899 年 3 月、葆林示寂の後を受けて、円福寺(京都府綴
喜郡八幡町)に転じ、1900 年清国(中国)の宗教事情を視察、1908 年請ぜられた大徳寺派管長
を兼任、3 期連続してその職にあったが、1922(大正 11)年 12 月 23 日示寂した。世寿 75
歳。黒本は大徳寺仮寓時代宗般を訪問しているが、熊本時代に見性寺の宗般玄芳と「入魂」^{じつこん}
だったことは既に述べた。浅井と黒本の交遊が依然として続いていた資料として見逃す
ことのできないものだと思う。

12 浅井栄熙の瞑目

1931(昭和 6)年 9 月 30 日、帰熊 1 年にして、黒髪町小礮橋畔の知足庵において浅井栄熙
は 73 歳を一期に瞑目した。同年 10 月 3 日、葬儀が行われたが、熊本市長・山田珠一(元
・九州日々新聞社長)は切々たる弔辞を読んだ。少し長いが、浅井栄熙の人柄を知る上に貴
重な資料なので引用する。

弔辞

維時昭和六年十月三日 山田珠一同人一同を代表して謹んで浅井栄熙君の柩 前に
ひざまづ うやうや
跪き 恭しく弔辞を捧ぐ

君資性温厚にして思慮周 匝幼より学を好み 夙に東都に遊びて漢洋の学を修め、研
鑽年あり業成りて教育其他の職に従事し 後ち聘せられて済々黌の教師となり、其
の新進の知識と高潔の品性とを以て熱心育英の業に努力し功績顕著なるものあり
き。居ること暫くにして旧知の勧請する所となりて銀行の業に関係し偶々財界の恐
慌に逢ひ 銀行破綻し 関係者皆其責を引き損失を償はざるべからざるの運に遭遇せ
しが 責任を解せざるの輩は往々苟も免れんことを図り 其進退甚だ陋とすべきもの
なきにあらざりしも 君は其間に処して能く其義を重んじ 其責に任じ毫も廻避する
所なかりき。其の潔美の心事と真摯の態度とは君を知るもの皆歎称敬服して止まざ
る所なりしなり。然れども君は之が為めに俄に家産を喪ひ 陋 境に陥り 数奇轆轤
数年の久しきに及びたりしが後ち 旧藩主細川侯に用ひられて家扶に任じ 爾来精励
恪勤二十余年 其忠直の性と温雅の質とは能く侯家上下の信頼を得て重きを内外に
有し 陰然侯家の柱石たりき。然るに先般年老の故を以て閑を乞ひ 聴されて郷里に
帰り 新に一字の隠棲を白川の涯風光明媚の地に築き 閑適自居悠々風月を楽みて老
の至るを忘れたりしが 不幸にして一朝二豎の冒す所となり終に溘焉長逝す 嗚呼悲
しいかな

君の生涯を通観するに其の前半生は多くの逆境に立ち不遇を歎じたるも 後半生
は之に反して平和順便の境遇に入り 怡楽の中 終に塵寰を脱し遠く白玉楼中の人と
なれり。而も君は陰夷兀と胸中に滞らず順逆共に雲烟の眼を過ぐるが如く常に其位
に素して行ひ其外を願はず君に対して共に語れば 恰も春風の中に座するの思あり。
其の信ずること厚きものあるにあらずんば何ぞ此くの如くなるを得んや。君は参禅
多年自得する所頗る大なるものあり。平生茶道を修め 深く三昧に入れりと称せら
る 君の平生世に処して超脱敢て緊縛せらる所なかりしは蓋し其根底甚だ深きもの
あるを見るべきなり。而して吾等の君に推服して措かざりしものは別に一事あり。
君は常に志を君国に存し 心を風教に注ぎ 身は政治圏外に超立すと 雖も 談偶々国
事に及べば慷慨の気眉宇に現はれ 忠愛の情言辞に溢れ 人をして膝を促がして傾聴
止む能はざらしめたるもの是なり。晩年閑地に就き 風月を友とするも猶ほ時勢の
日に非にして人心の敗類するを憂ひ同人と相謀り 之が矯救の道を講せんことを企
てたるも其事未だ施すに 遑 ならずして終に志を抱きて長逝せられしは真に悼惜に
堪へざるなり

嗚呼 此人一度世を捐て永く帰らず幽明相隔てて再び温容を仰ぐに由なし。一輪
の皓月は前川を照らすも誰か亦た岩頭の旧蘆に高臥して之を幽賞するものぞ。秋
風寂寞哀傷何ぞ云ふべけんや。茲に謹みて追慕の真情を叙して哀弔の微忱を表す
英霊髣髴として尚くば来り饗けよ

昭和六年十月三日

山田珠一

もう1つの弔辞は教え子の代表として山田猛が読んだ。

弔辞

昭和六年九月三十日 恩師浅井栄熙先生突然脳溢血に罹り^{こうえん}溘焉長逝せらる。痛惜哀悼に勝へず

先生は夙に^{つと}笈^{きゆう}を負ひて帝都に上り中村敬宇先生の同人社に学び 明治十七、八年の交業なりて熊本に帰り 泰勝寺御邸内に在りて後進者の為に英語を教授せらる。当時熊本に英語を教授する人なく 時勢は漸く英語の必要に迫られ 書生之が学習に苦しむ。是に於て朋友知己先生の左右を囲み 青年子弟先生の門下に集まり 教を乞ふ者日に月に増加せしかば遂に立田口久本寺を教室に充て 更に専門の師を聘し 英漢数を教授せらる。他日知名の人士門下に輩出せしは一に先生の啓発による。後先生^{のべ}濟々^{ひひ}鬢、第五高等中学校、福井中学校に育英の任に当り 文部省翻訳官、衆議院書記官等に歴任し 第九銀行監査役となり 細川侯爵家家扶として長く奉仕せられしが昨今辞任して居を小碓橋畔^{ぼく}に卜して風月を友とせらる。在熊門下生一同歓迎会を催し 爾来継続して同窓会を開くことを約し 永く指導を仰がんと乞ひしに忽に^{じんかん}塵寰を脱し 白玉楼に上り給へり。嗚呼悲しいかな

茲に先生の葬儀に列し 謹んで弔辞を陳んと欲す。秋雨霏々として懐旧の情禁ずる能はず。万感胸に塞り 言ふところを知らず。希ば英霊^う髣髴として来り享け給はんことを

昭和六年十月三日

門下生総代 山田猛

山田猛の弔辞には、経歴に少々錯誤があるが、2 つ共に浅井栄熙の人となり、充分に物語っている。

13 浅井栄熙の人となり

小宮豊隆は「³⁸ 浅井は洒脱で自由で、熊本では人々から随分敬愛されてみたさうである」と書いたが、3 男・栄資氏の、父・栄熙に対する印象としては謹厳実直、温厚篤実、誠実無比な、無口で地味な人だったそうである。晩年まで禅との関係を持ち、後には細川侯や一条公などとともに関西の大徳寺・妙心寺・円福寺に参禅したらしい。家庭でも毎晩就寝前には読経を欠かさず、禅僧のような枯淡の生活をし、禅宗の師家たちを我が家に招いて供養をしたりしていたので、僧俗の間ではかなり名の通った居士であった。

浅井は無類のお人よしであったようだ。自分の子供が 7 人もいるのに、親類縁者の子弟はもとより、昔家で使っていた男や女の子供、はては父の同僚の遺児まで、頼まれると皆家に引き取って世話をするので、家の中は常に火の車で、妻や長女たちが苦勞したとのことである。子供たちが苦情を言うと、「そんなわけにもいかんたい」と言って、その癖は生涯直らなかつた。東京赤坂の細川侯邸内に住んでいる時は、熊本から上京する新入学生の世話をよくしたそうだ。

俳句修業したのは、漱石の熊本時代で、漱石が宗匠であり、吟行にも加わったことがあるようだ。栄資氏の御記憶では、栄熙の句として「ともすれば時雨がちなる野点^{の だて}かな」だけ憶えておられるそうである。俳号は不明である。

晩年、特に力を入れたのは茶道修業であった。時々、茶会を催して知人を招待する時は、栄熙が自ら魚河岸に行つて魚を買つて来て、たすき掛けで自分で台所に出て料理をす

るのが、最大の楽しみであった。父の鼎泉時代ならいざ知らず、単なる月給取りの身分で、分に過ぎるのではないかと栄資氏が苦情を言うと、「金をかけずに、いかに客に楽しんでもらうかが佗茶の真髓だ」と笑ったそうだ。

浅井栄熙が中村敬宇の同人社に学んだ経緯は判然としない。察するに当時福沢諭吉などととも青年の志向を捕える声名を慕ったものであろうか。自助論と浅井栄熙の思想との関係も分明ではない。ただ、栄資氏が中学4年のころ、スマイルズの『セルフ・ヘルプ』の英文本をあてがわれたことがあるそうだが、自助論に啓発されることが多かったのではなかろうか。1887(明治20)年、友人の坂本筒蔵氏と『孝女美談 砂漠の花』と題する訳本を出版した。原著書名は "Élisabeth, ou Les exilés de Sibérie." (1806年)。原著者は仏のマダム・ソフィー・コタン Madame Sophie Cottin (1770 ~ 1807) である。これの最初の英訳書は、1810(文化7)年にアメリカ・ニューヨークで出版された Paraclete Potter (1784 ~ 1858) 訳、 "Elizabeth, or The exiles of Sibeia, a tale founded upon facts." であると思われるが、その後も多くの出版社から出版されているため、浅井らが訳出に用いた本がいつこの出版社から刊行された、誰の翻訳によるものなのか、今となっては特定が難しい。

1980年代、この古書が古書目録に出たので、私は栄資氏に連絡、購入された。栄熙の蔵書の中には、英文のシェイクスピアの作品がたくさん残っていたので、相当高度の英文をこなしていたと思われる。ただ、浅井栄熙が五高ではたして英語の授業をしていたかどうか疑問が出て来た。即ち、「第五高等学校職員調」を調査してみると、1885年9月末日現在のもの、同年12月末日現在のもの、1899年9月末日現在のもの、いずれも英語嘱託としてではなく、「担当」は「学寮掛」であり、「1週授業時数」はない。従って、実際は英語授業はしなかったと想像される。

では、浅井栄熙は夏目漱石の作品の中で、誰と一番イメージが一致するであろうか。栄資氏は『坊っちゃん』の「うらなり」が風貌やイメージともにぴったりのようだと書いておられる。

夫から英語の教師に古賀とか云ふ大変顔色の悪るい男がいた。大概顔の蒼い人は瘠せてるもんだが此男は蒼くふくれて居る。昔し小学校へ行く時分、浅井の民さんと云ふ子が同級生にあつたが、此浅井のおやぢが矢張り、こんな色つやだつた。浅井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるのかと清に聞いて見たら、さうぢやありません、あの人はいらなりの唐茄子許り食べるから、蒼くふくれるんですと教へて呉れた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬だと思ふ。此英語の教師もうらなり許り食つてゐるに違いない。尤もうらなりとは何の事か今以て知らない。清に聞いて見たことはあるが、清は笑つて答へなかつた。大方清も知らないんだらう。(『坊っちゃん』2)

浅井栄熙は小柄で、生涯酒も煙草もたしなまず、正座をくずしたこともなく、自墮落に寝転んだりしている姿を、子供たちに見せたことはなかつた。顔色は、若い時からの健康状態から、「うらなりの唐茄子」のように青黄色だったそうである。山嵐が送別会の挨拶のことばにうらなりを評して「温良篤厚の士」(9)と言ひ、坊っちゃんは「うらなり君はどこ迄人が好いんだか、殆ど底が知れない。」(9)と評している。これは確かに晩年の浅井

栄熙の面影を宿しているが、五高時代の彼は、黒本植の『肥後異人談』に描かれたごとく、慨世家であった。「浅井のおやぢ」が出てくるが、漱石の潜在意識の中に、青黄色の顔色をした浅井栄熙と、『坊っちゃん』の中の「浅井」と「うらなり」と連想が働いたのかも知れない。（『虞美人草』にも「浅井」が出てくる）

浅井栄熙が東京家政所に転じたのは、1912(明治 45、大正元) 年秋であった。牛込区早稲田南町の夏目漱石宅を訪ねたという記録はない。浅井栄熙宛の漱石書簡は1通もない。漱石の死まで4年数ヶ月の歳月を共に東京で過ごしているが、栄資氏の御記憶では晩年の漱石と交遊した痕跡はないとのことである。万事、控え目に生きて来た浅井にとって、文豪漱石はもはや遠いはるかなる人であったのか。名利に超越していた浅井栄熙には、文豪夏目漱石の名声は必要なかったのであろう。

-
- *1 「『熊本の漱石』雑考」蒲池正紀『熊本商大論集』第45号（1975年3月31日）
 - *2 浅井栄熙の3男・栄資氏の私宛書簡による。
 - *3 「漱石のあとを訪ねて」松岡譲『漱石先生』岩波書店(1934年11月20日)
 - *4 [子規へ送りたる句集 29 20 句] 1898年。『漱石全集』第17巻「俳句・詩歌」(岩波書店、1996年1月12日)
 - *5 「夏目漱石と熊本」の「井川淵の家」山崎貞士『熊本文学散歩』大和学芸図書(1976年4月20日)
 - *6 『野田先生伝』沢田有志夫編著（江原会刊）1960年
 - *7 浅井栄熙の3男で、1899年4月30日、熊本市生まれ。元・東京商船大学長。日本海技協会会長。主著、『慟哭の海——知られざる海上交通破壊戦——』
 - *8 浅井栄資氏作成の「浅井家系譜」による。
 - *9 浅井栄鎮(新九郎・鼎泉)のことを記した資料としては、①『肥後先哲偉蹟』後編巻5(武藤巖男編、1928年)「浅井鼎泉」、②黒本植の「肥後異人談」(稼堂叢書、1932年10月1日)「浅井鼎泉」、③『明治維新人名辞典』(吉川弘文館、1981年9月10日)「浅井新九郎」
 - *10 第五高等学校に提出した浅井栄熙自筆の履歴書(熊本大学保管)による。
 - *11 浅井栄熙がなぜ福井に行ったかわからないが、越前福井藩主松平春嶽(慶永)夫人は肥後熊本藩細川家の女であるから、越前藩と肥後藩は親戚関係であり、横井小楠も越前に行っているの、縁故があったのであろう。
 - *12 濟々鬢の『創立九十周年記念号 多士』(1973年2月28日)所収の佐々友房稿「濟々鬢歴史」にも1884(明治17)年4月に「浅井栄熙氏ヲ普通学教師ニ(後半年病ヲ以テ辞セラル)」とある。この文には父・鼎泉の名も見える。
 - *13 五高就任から辞職までの経歴については、五高事務当局作成の履歴書(熊本大学保管)による。
 - *14 「肥後異人談」黒本植(稼堂)『稼堂叢書』1932年10月1日、稼堂叢書刊行会。「浅井交翠」本書187頁
 - *15 第五高等学校長中川元に提出した辞職願が、現在熊本大学に保管されている。それには自筆で次の通り書かれている。本書165頁

「私儀従来座骨神系痛相悩み候処
頃日頗激甚ヲ加、何分奉職仕兼候ニ付
何卒現職御免被成下度此段奉願候也

明治三十年三月十七日 囑託員 浅井栄熙 印

第五高等学校長 中川 元殿」

- *16 拙著『夏目漱石と菅虎雄 ——布衣禅情を楽しむ心友——』（教育出版センター、1983年12月10日）を参照のこと。
- *17 1894年9月4日付正岡子規宛漱石書簡
- *18 同前
- *19 同前
- *20 1891年8月3日付正岡子規宛漱石書簡
- *21 1895年1月10日付斎藤阿具宛漱石書簡
- *22 菅虎雄宛の宗般書簡3通を虎雄の4男・故高重氏が所蔵されていた。①1903年6月16日付。②1904年1月12日付。③1911年1月4日消印。
- *23 東海裕山編『三生録』（1941年9月1日、梅林寺刊）。『三生軒 猷禅老師五十回忌 遺墨展集』（1965年9月24日、梅林寺刊）
猷禅玄達(1841〈天保12〉年4月8日～1917〈大正6〉年5月1日)は美国方
県郡洞野村に大谷泰助の3男として生まれる。1852(嘉永5)年12歳で恵利寺礼
源和尚に従い、薙髪。1854(安政元)年4月、得度。1879(明治12)年2月39
歳で久留米梅林寺第15世住職となる。1905(明治38)年4月、妙心寺派管長と
なる。1917年77歳で遷化。漱石は、下関市永福寺の鬼村元成宛書簡で猷禅
の絵と書を書いてもらいたい希望を書いている(1916年8月14日付。10月8日
付)。
- *24 「山田珠一」伊豆富人『熊本人物鉅脈 ——この100年をつくる——』熊本日々新聞
社(1963年5月)
「山田珠一」荒木精之『『熊本人物誌』第1編、日本談義社(1959年6月1日)』
- *25 本書195頁に引用
- *26 後に九州帝国大学医学部眼科教授
拙著『夏目漱石と菅虎雄 ——布衣禅情を楽しむ心友——』（教育出版センター、1983
年12月10日）所収「菅虎雄年譜」及び「菅家系図」
- *27 「漱石の俳句 ——俳句との訣別と邂逅——」蒲池正紀『草枕私論 ——夏目漱石新
論』もぐら書房(1973年1月20日)
- *28 「黒本植(稼堂)と熊本 ——夏目漱石をめぐる——」桑山周一『石川郷土史学会々
報』第12号(1979年12月1日)
- *29 ①「漱石の『祝辞』について」鹿子木敏範『気質季報』第12号 (熊本大学体質医
学研究所気質学運営会)1978年3月23日
②「『漱石の祝辞』について」鹿子木敏範『日本病跡学雑誌』第17号 (日本病跡学
会)1979年5月15日
- *30 桑山周一作成「黒本植(稼堂)年譜」による。
- *31 熊本大学保管

- *32 「第四高等中学校長中川元 ——金沢時代の狩野享吉をめぐって——」中川浩一 『茨城大学教育学部紀要』(人文・社会科学・芸術)第30号(1981年3月)
- *33 「畿内巡杖記」坤「円福寺詣」黒本植(稼堂叢書)1932年4月7日発行
「和尚ハ熊本見性寺ニ住職ノ頃ヨリ入魂ナリケレハ、フトオモヒタチテ尋ネシニ、
熊本提唱ノ残講ニ赴キタリトテアラス」
- *34 「漱石の『祝辞』について ——漱石と黒本植——」北山正迪『文学』第47巻第11号(1979年11月10日)
- *35 『漱石の思ひ出』「13 洋行」夏目鏡子(角川文庫)
「この帰京します時に、遠いところを道具を持ち運ぶのもと存じまして、家の道具を皆さん御懇意の方に置き土産としてあげてきました。そのうちに松山時代より持つてゐた机がありまして、それは熊本の方で浅井さんとおっしゃる方に差しあげました。その方はいま細川家の家令をしてをられるさうです。廻りと足とが竹でできておりましたが、今どうなつてをりますかしら」
- *36 桑山周一氏により送付された。全部解読まで至っていないとのこと。
- *37 「熊本累年気象表」熊本測候所刊行(1931年10月)
- *38 『夏目漱石』「32 結婚生活」小宮豊隆(岩波書店)

(文責 山口範子)

※ 初出：『近代文学論集』第7号(日本近代文学会九州支部 1981年11月20日)